

文 化

V日本協会設立から五十周年にあたる。私は国際基督教大学の学生だった六一年、子供たちの引率者として英国でのキャンプに同行して以来、中断を挟みながら、協会の仕事にボランティアとしてかかわってきた。

まずスキップで

CISVは国連教育科学文化機関(ユネスコ)認可の非政府組織で、加盟国は約七十カ国にのぼる。活動の中心は「ビレッジ」と呼ばれる十一歳の子供限定のキャンプ。毎年夏、約四十カ国で六十以上のビレッジが開かれる。そのほか、十二歳から大人まで、年齢や発育段階にあわせ

米国にドリス・アレン(一九〇一年―二〇〇二年)という児童心理学者がいた。前半生で二度の大戦に直面した彼女は、世界の平和を築くには、子供の時から国や人種の違いを超えて交流することが必要と考えた。そして一九五一年、欧米など九カ国から十一歳の子供四十四人を集め、オハイオ州シンシナティでキャンプを開く。国際子ども村(CISV)の始まりだ。今年は一九七七年のCISV



キャンプでは体を使ったゲームを採り入れる

ビレッジでは体を使ったゲーム、絵画教室、音楽やダンスなどを中心にプログラムを組む。言葉に頼らなくても、スキップで思いは伝わる。中には親に言われて嫌々参加した子もいるし、人見知りの子もいる。そんな子供も数日間一緒に暮らすうち、すっかり溶け込んでしまう。

たが、電子メールが普及した今は、互いにアドレスを交換し、帰国後も連絡を取り合っている。親しくなった子同士が、互いの国を歩き来るとも



岩崎 統子

◇11歳児のキャンプ、国や人種の違いを超え交流◇

国際子ども村の半世紀

たプログラムがある。最も歴史が古いビレッジは、十二カ国から四十八人の十一歳児が集まり、外部からほとんど遮断された環境で四週間一文化理解に最適な年齢と博士は考えた。

う設定はアレン博士の理論に基づく。十一歳は内面が生理的、情緒的に安定している一方、固定観念に染まっておらず、異文化理解に最適な年齢と博士は考えた。

国や人種の違いを超えるといっても、参加者の文化や宗教は尊重しなげればならない。日本でキャンプをするときも、必要に応じてベジタリアンや宗教に配慮した食事や礼拝空間を用意する。

ある子が面白いことを言った。「地図上の一点にすぎなかった国が、キャンプに参加して友達がいる国に変わった」。CISVが求めるものを端的に示す言葉だと思う。私は六歳で終戦を迎えた。戦後住んだ横浜にはアジア系を含む多くの外国人がいた。当時、彼らへの偏見がなかっただろうかと反省は、ずっと私の中にあつた。

そんな私が大学に進んだ時、日本協会の創設者だった桑野達平先生に「英国キャンプの引率者にならないか」と誘われた。六一年ころは中流家庭の月収が最高でも五万円という時代。七万二千円の参加費用は、親せきに頭を下げて借りた。

は現在CISVの日本協会と国際組織で活動しており、自分の子供もキャンプに参加させた。彼女の母親も協会にかかわっている。彼女のように三世代にわたって参加している家庭も多い。

キャンプ地の英アニックカッスルは、後に映画「ハリ・ポッター」シリーズでホグワーツ魔法術学校のロケにも使われた古城。参加九カ国のうち、東洋人は私たちが多かった。寒さに震える私に、現地のスタッフが羊毛のセーターをプレゼントしてくれた。そのぬくもりは今も忘れない。

その後、教員の仕事が忙しくなり、実務から離れていたが、二〇〇二年の定年を機に復帰した。声をかけてくれたのは六〇年代の参加児童。彼女

子供たちのその後を追跡調査したところ、多くの人が国際協力、教育、医療など専門職に就いていた。九〇%を超す人がCISVの経験が自分にプラスだったと答えてくれたことは何よりうれしい。半世紀で日本協会が送り出した子どもは約五千人。次の半世紀、参加してくれる人が増えることを心から願う。(いわさき・のりこ 国際子ども村日本協会国際理事)